
現のち夢ときどき架空 うつつ のち ゆめ ときどき から

深海

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現のち夢ときどき架空 うつつのひ ゆめときどきから

【Zコード】

Z9075L

【作者名】

深海

【あらすじ】

お見合回数、二桁達成まであと少し。

そんな主人公、片桐紗柚は32歳独身。

お見合いの回数を重ねるたびに傷つき疲れ、この際自分と結婚してくれるなら誰でもいいとやけになりながら、お見合いをするようになつていった。

そんな紗柚が一人の男性と出会い、彼との出会いが、紗柚を変えしていく。

紗柚の視点のみで描かれる独白小説。

彼に愛されないけれど、彼を愛している自分。

彼は私にとつて片翼なのだ。

比翼の鳥、それは愛するもの同士を指すけれど、全ての人が自分の片翼となる存在を見つけられるわけではない。翼が無くても飛べないだけで生きてはいけない。飛べないけれど、別の人と結婚し家庭を作り家族を作り幸せになれるだろう。

彼となら私は翼を得て飛べるだろう。でも、幸せにはなれないとわかっている。

人は愛だけでは生きてはいけない。愛が無くても生きてはいるけれど……。

飛ぶ必要など無いのだから。

終わった。

これがハ回田のお見合だつた。相手の名は早川恆毅。

今回こそは結婚したい。

毎回そう望んではいるけれど、やはり現実はうまくいきはしない。見合の回数を重ねるたびに、それなりに得られるものはある。お見合い相手が結婚を本気で望んでいるか、親に圧しつけられているかはなんとなく察することが出来るようになつた。それでも相手が結婚を本気で望んでいるのか見極めるにはある程度の時間は必要だ。

早川さんは、見合を親に圧しつけられているようだつた。私との付き合いも上辺でしかなかつた。結局、彼とは7週間の付き合いだつた。交際期間は短いとも長いとも言えないが、今までのお見合相手でデートの回数は一番多かつた。会つて特に何かをするでもなく、かと言って彼との会話が盛り上がつたわけでもなかつた。ただ、一緒にいるのは楽しかつたから、デートに出かけるのも億劫には感じなかつた。

今日のデートの終わりに一人で本音を話し合つた。

彼は恋愛結婚を望んでいて、この見合は親から圧しつけられたものだつた。私のことも、正直に「抱く気にならない」と言われた。お互に友情以上の感情を持てなかつた。

結局、二人の関係を終わらせることになつた。けれど、もう少し付き合つてみれば何かが変わつたかもしれないとお互いが何かを感じて、別れを惜しんだ。私からもう少し付き合つてみないかと言い出すことは出来なかつた。勇気が無かつたわけじゃない。ちっぽけなプライドが邪魔したのだ。終わらせると決めた以上は、自分の判断を信じたかったのだ。話しているうちに何かが変わつたけれど、それに気付かない振りをしたかったのだ。

部屋に戻つて一人になつてしまつと、いろいろ考へてしまつた。
愛情は無いけれど好意があれば結婚してしまつてもいいと思つて
いる私にとつては充分すぎる相手だつたけれど、相手は恋愛結婚を
望んでいた。

最初に本音で話していれば良かつたのだろう。

お互に話をしてきちんと向き合えば無駄に時間を過ぐす事には
ならなかつただろう。

無駄……無駄に時間を積み重ねていけば、愛情は芽生えただろう
か？ いや、進展の無さに自分は飽きてしまつていただろう。

愛情はそんなに大切なものだろうか？

とにかく、結婚してしまいたい私にとつては嫌いでなければ誰で
も良かつた。

翌日、パソコンをネットに繋げると、メールが届いていた。ファ
リイというサイトからメッセージの受信があるという内容だつた。
ファリイは、私が最近登録した中日交流・交友の「ミニアティー
サイト」だ。そこでは、中国人や中国語を勉強している人と交流出来
る。

早速、ファリイに接続し、メッセージの確認をすると、友人の一
人である藍からだつた。目に飛び込んできたのは、
彼女とやり直すことになりました。

なんてタイミングの悪さ。私は昨日振られたばかりだといつのに
……いや、振られたわけではなく話し合つて別れただけだろうけど
……心境としては、やはり振られたという言葉がぴったりくるわけ
で、妬ましさや羨ましさ、そういう感情が浮かんでくる。

私の事情は彼にはもちろん関係ない。自分の感情は抑えて、返信
のメッセージに

頑張つてください。

とただ一言添えた。

ファリイで私のニックネームはk o aだ。

ネットの世界と関わることになつてからの私のハンドルネームはずっとk o aだつた。『核』という意味で、なんとなくつけた本名とは全く関係ない名前。だけど、10年以上も使つていれば愛着も湧いてくるもので、もう一人の自分のようだつた。

でも、k o aは現実の私と同じ。自分は自分でしかなくそれ以上でもそれ以下にもなれない。消極的で自分自身を移した分身に過ぎないのだ。

積極的に行動できずに、ファリイでの友人は相手から申し込まれた三人しかいない。ファリイでしていることは、時々日記を書いているだけ。そんな私のどうしようもない日記に藍はよくコメントをくれた。だから、彼に興味を持つて彼の日記を読むようになった。彼のある日の日記を読んで、随分攻撃的な人だなと感じた。正直、関わりたく無いと思つた。けれど、別の日の日記を読んで、イメージはがらりと変わつた。

纖細で純粋、傷つきやすい心を持つた人。彼をただただ好きだと思つた。その感情は特別な色も無い軽い気持ちでの好き。

本当の意味で、彼が彼女と幸せになつて欲しいと思つたのは、この時からだつた。

永遠の愛の存在を信じる彼。愛する人と結婚し最後まで添い遂げると強く願う彼。

彼の何を知つていてるといえば、何も知らない。ただ、真剣に誰かを想つていてる彼が眩しく思えた。彼が愛しててる彼女と幸せになれるこつを願つた。彼が誰かを真剣に愛して幸せになつて欲しい。

そんな彼が、愛する彼女とよりを戻し、そして結婚すれば……希望の星つていう言い方は青春っぽくて恥ずかしいけれど、自分的人生にも何か希望を見出せる気がして、彼と彼女との関係の進展が、私の一縷の望みになつた。

だけど、この時の彼との関係は希薄で、彼は私がこんなことを考
えていることなんて何も知らなかつた。彼は私の日記にコメントを
してくれたことはあつたけれど、私が彼の日記にコメントをしたの
は一度だけだつた。

親しくも無いコミニティーサイト内の友人で、たいした繋が
りじゃない。

それでも、書かれたコメントにコメントを返して、知らず知らず
のうちに私の中で彼の存在感が大きくなつていくのがわかつた。

彼が消えた。

胸に生まれた喪失感は軽すぎるものではなかつた。

ネットの世界では、簡単に誰とでも出会える。と同時に簡単に別れはやつてくる。そう、わかつてはいるけれど、喪失感を感じるなという方が無理だ。いや、彼を失つたことは、他とは違う。今まで幾度もネット上で出会いと別れがあつた。でも、彼との別れは何かが違つた。

そのショックを受けて数日後、彼らしき人からメールが届いた。ニックネームが違つて彼かどうかわからなかつたが、プロフィールを見たら、彼のような気がした。

彼だと明確に判断できるものは無かつたけれど、インスピレーションで彼だと感じた。だから、

ところで、本当に『初めてまして』なのでしょうか？

その言葉を付け加えてメッセージを送つた。

やつぱり彼だつた。

嬉しくて、でも、恨みがましくもなつてこんなメッセージを送つた。

「こんちは、k o aです。

インターネットの中の繋がりで薄い関係かもしれません、出会い系があつて何時かは別れが訪れるものとわかつてゐるけれど、藍さんがいなくなる度に寂しい気分を味わつています。

でも、今、藍さんがとてもつらい時期で心が不安定のかなと心配もしています。

藍さんが彼女のことで悩んでいるのを知つて、がんばつてと軽々しく言えるほど、あなたのことを知りませんが、お一人の恋愛がうまくいけばと心中では応援していました。

ただ、藍さんが幸せになることをお祈りしています。

このメッセージを送つたら彼から意外な返事がきた。

彼の方から携帯電話とメールアドレスを教えてくれたのだ。驚いて、嬉しさがじわじわとやってきた。

けれど、現実で繋がることに戸惑いがあった。彼を信用しても大丈夫かどうかわからなかつたのだ。

結局、ネット上の彼の言葉からは信頼するに値すると判断して、彼に連絡先を教えた。

ただ、この時の判断が正しかつたか、今でもよくわからない。

第2章（後書き）

小説を投稿したことすつかり忘れていて、慌てて投稿しました。

彼とメールを交わすことはドキドキした。
久しぶりのトキメキだった。

二年前から始めたお見合は散々だったのかもしれない。結婚するという結果が出でいないのだから、『だつたのかも』なんてはつきりしない言い方は避けた方がいいのかもしれないが……。

最後に人を好きになったのは、20歳の頃。それから9年経った。どうすれば人を好きになれるのかわからなくなっていた。恋愛の仕方を忘れてしまった。どうやつたら本気で人を好きになれるか真剣に悩んだりした。

でも、人を好きになれる方法なんて無かつた。その人に出会えば自然と好きになれるものだ。好きっていう感情は、頑張って努力して得られるものではない。そんな簡単なことを忘れていた。

このことを思い出させてくれたのは、まだ会つてもいない言葉を交わすだけの藍だった。

初めて会話した日からどんどん惹かれていった。彼に対しての好きという気持ちは、変化しつつあった。この感情の変化は私に戸惑いを与えた。

何もかも諦めて結婚する意志を固めていたのに、好きになりそうな人に出会うなんて……。結婚に對して迷いが生まれた。

やはり彼とはタイミングが悪い気がする。

私は結婚には何も期待していない。愛せる人に会えて、その人が同じくらいの想いを返してくれる。そんな奇跡があるだろうか。そんなこと、私自身に起こりえるとは思わない。

永遠に続く愛なんて無い。だから、嫌いじゃない人と結婚すれば、

最後まで添い遂げられるとと思つ。好きにはなれなくても、嫌いじゃないなら一緒にいるのも苦痛にはならないだろう。そう、考えていた。

彼に自分からメールを送信するのを控えるようになつた。それは自分の無意識の防衛だと気付いたのは、彼からのメールを心待ちにしている自分を認めたときだつた。だんだん怖くなつた。彼へと向かう自分の想いが恋愛感情に育つてしまつ予感が心の何処かにあつたのだろう。

けれど、いつのまにか芽を出した感情は、水や栄養を与えなくてもすくすくと育つてしまつっていた。

いつたん自分の感情を認めてしまつと、今までこの感情に気付かなかつたことが不思議でならない。

この感情を消すことが出来ないのは、自分には一番良くわかつてゐる。もつ、退くことは出来ない。前に進むしか道は存在しない。

実際、会つてもいゝ人に本気で恋愛感情を持つことが出来るなんて思つても見なかつた。

でも、有り得ないことではなかつた。

私の今までの恋愛は、人の内面に惹かれてから恋愛感情に発展するパターンだ。

ネットで知り合つた人と、メールを交わすうちに好きになることがあるかもしれないと思つていて。有り得ないことではないと思つていたからこそ、一番恐れていたことでもある。自分が結構惚れやすい性格だと自覚している。

この恋愛は自分の人生に黒い染みを落とした。

「Jの恋にかけてみようと思つ。絶対に上手くなんていいかないと思つ。

確実に、人生の回り道になるが、最後だと思つから彼に会いたいと思つ。

自分から彼に会いに行くことを決めた。

自分の住んでいる所から、他の県への一人旅なんて初めてで、尋常ならざる緊張感でいっぱいだつた。旅行の荷物の準備、交通手段の手配、それだけでぐつたりしてしまつた。無事に行つて帰つてこられるだろうか？

旅行の不安で頭がいっぱいしばらくなつた。

旅行の当日、旅行鞄を片手に家を出た。無事に辿り着けるか不安しかない。

バスに乗り、電車に乗りひとまず、乗り換えまでは少しは落ち着けるだろう。乗り換えが上手くいくか不安なのだが、初めて乗る新幹線が楽しみでもある。

電車から見る景色はある地点からは始めてみる景色に変わる。見知らぬ景色だが、見える景色は自分の住んでいる所となんら変わらないものだつた。日本国内の移動ならそんなものなのかもしれない。地続きの移動に過ぎない。そんなに不安になることは無いだろう。そう自分を落ち着かせようと思つが、昂揚感もあって落ち着いてなんかいられなかつた。

特急から新幹線に乗り換えるのに、少し待ち時間があつた。ホームの椅子に座り、見るともなしに景色を眺める。しばらく旅行のことばかり考えていて、藍のことを考えていなかつた。

このまま進んでいいのだろうか。立ち止まって冷静になると、自分が愚かな行動をしているのではないかと……。

私は乗るはずの新幹線を見送った。

わからなくなってしまった。

自分の気持ちを伝えたいというそれだけで、彼に会いに行つてしまえば、彼は迷惑に感じるだろう。

自分の気持ちにけじめをつけ、振つてもうつ為に会いに行くのだ。会いに行かなくても、振つてもうことは可能なのだ。会いに行くのは……会いに行く……どうして会いに行つとしたのか？

ただ、会いたかった。

彼の笑顔が見たかった。

あなたが好きだと伝えたかった。

会いに行くにしても、気持ちを伝えることは出来ないだろう。

苦しんでいる彼に、気持ちを伝えることは出来ない。彼は今、彼女とは上手くいっていないらしい。別れているのか、付き合っているのかは、はっきりとは聞いていない。けれど、彼女のことでの傷ついているのはよくわかる。

今、大切なのは、私の気持ちを優先することより、彼をそつと見守ることだ。

愛情の深さと比例して彼は傷ついているのだろう。

彼女を愛した3年間。

どれほどの苦しみか私には想像がつかない。

頑張れとも言えないし、諦めろとも言えない。ただ、時が経ち自然の流れに任せることしかないだろう。彼の心の傷が癒されるのを祈るしかない。

私は彼に何も出来ないのだ。

話を聞くことも、慰めることも、ただ側に居ることすら出来ない。彼にメールで励まそうと思つたけれど、何と書いていいのかわからなかつた。

次第にメールは途絶えがちになつた。私のメールが彼の負担になつてゐるような気がして、こちからメールを出すのをひかえるようになつた。それだけじゃない。これ以上彼と言葉を交わして自分の感情を育てるようなことはしたくなかった。

彼に言られた「一生の友達だ」。この一言は、私に突き刺さつた。一瞬言葉が出てこなかつた。でも、これは彼との連絡が途絶えても、繋がつていらざると信じてもいいと言わわれているような気がしたのだ。

彼と音信不通になつた。

次のお見合いの話がきていたけれど、どれも決まらず3ヶ月が経とうとしていた。

そのころには藍さんへの気持ちの整理はついた。この3ヶ月、中国語を勉強する気にはなれず、何も考えたくなくて、小説ばかり読んで現実逃避をしていた。

何度も何度も彼にメールを送りたい衝動に駆られたが、結局彼に伝えようとする気持ちは言葉にならなかつた。

久しぶりに誰かを好きになって、自分の中で少し変わったことがある。

投げやりだつた。自分の人生どうにでもなれと思っていた。

私と結婚してくれる奇特な人が居るなら、私の気持ちは押し殺して結婚に応じるつもりだつた。

今までだつたら、相手が望めば誰とでも結婚するつもりだつた。唯一の条件は生理的に嫌悪を感じない人。でも、これからは真剣に向き合おうと思つた。

結婚に対する気持ちは投げやりだつたけれど、お見合い相手との付き合いはいい加減にしてきたわけじゃない。自分なりに出来ることは一生懸命してきた。それでも、お見合いは上手くいくことは無かつた。自分の中のどうでもいいという考えは相手に見透かされていたのかもしない。

失恋して初めてのお見合いに臨んだ。

お見合い写真も見ず、プロフィールも見なかつた。自分の見たこと、聞いたことだけを頼りに相手と接してみようと思つた。相手と接して感じたこと、それが一番大事なことだろう。相手が自分をどう

う思っているか推し量ることをせずに、自分の気持ちを大切にしよ
う。自分が相手をどう思っているか、それが一番大切なのだと思う。

九回目のお見合い相手、田畠祐司とは、序盤それなりに上手くこ
なした。

お付き合いに発展し、まともなデートはしたことが無かつたけれ
ど、彼とは一晩を過ごした。

避妊もせずに、拒まなかつたのはSEXへの好奇心と、やはりど
こかどうにでもなれという投げやりな自分だった。結局、そう簡単
には自分は変われないのだろう。

彼とのSEXは自分がいかに冷めていたか、冷静でいられたこと
が不思議でならない。気持ちよさなんて一つも感じられなかつたの
は、私の体の問題か、気持ちの問題か。

それにもしても、自分が好きでもない相手と寝られる貞操感の無さ
が痛かつた。

正直、妊娠したら責任とつてもうひとつというより、墮胎させてもら
うという感情が優先している。彼には恋愛感情が無いけれど、結婚
してもいいと思う。ただ、SEXはしたくないし、彼の赤ちゃんが
欲しいとは思わない。彼と自分の間に生まれた子供を愛せる自信は
無い。

お互い何も知らない。結婚してから、お互いのことをじっくり分
かり合うことも出来るだろうけど、少なくとも私の方は、結婚前に
将来自分の夫になるであろう人には話しておかなければいけない過
去がある。

気持ちが無いのに、お互い心を通わせる前に体を繋げてしまつた。
このことをはつきりと自覚した途端、私は彼に心を開けないだろう
と悟つた。

メールには下ネタ満載でそれが気持ち悪くて、返信するのも嫌になつた。一緒に行く約束をしていた花火、その後彼の家に泊まるのが嫌で、約束をキャンセルした。

その後、一度食事したけれど、話しているのも疲れた。誕生日に会いたいと言われたが、自分の誕生日はもう大体予定を立ててしまつていたので会えないかも知れないと言つておいた。

誕生日の前日にメールで会えないと送つたら、別れを切り出された。そのメールは私が浮氣していると決め付ける内容で、ナイフで切りつけるような言葉の暴力だった。

実際には浮氣なんてしていなかつたから、そんな二股かけるような人間だと疑われた時点で付き合つてはいけないなと思った。正直、田畠さんを愛してはいなかつたし、藍さんへの想いがあつたから二股していないとはいえないけれど、不誠実だったことは認めるしかない。

謝罪をこめたメールを返信し、別れを了承した。すると、手のひらを返したように友達で付き合つていこうとメールを返信してきた。一度出したメールは相手が消さない限り残つてはいるわけで、あんなメールを送りつけておいて、友達で付き合つていこうなんてメールを送れたなど、彼の思慮の浅さに苦笑するしかなかつた。

無理だと思う。彼には時々話が通じないときがある。彼を理解しきれないし、彼には私を受け入れる度量の大きさは無い。

このことが決定打となり、関係を終わらせることになつた。

藍さんに嫌われた。

彼にアクセス拒否をかけられ、彼のスペースにアクセス出来なくなり、メールの返事もこなくなつた。

全てがどうでもよくなり、中国語検定の試験さえも放棄したくなつた。試験勉強もやる気が無くなつた。

それでも、なんとか自分を鼓舞して試験は乗り切つた。

けれど、試験が終わつた後は、不合格確實だつたので中国語を勉強することを止めてしまおうと考へた。関わりたくないなかつた。彼との連絡さえも全部絶つてしまつたから。ファリイを退会して、携帯の番号も変えてしまおうと思つた。

何度も彼に送つたメール、彼から送られたメールを消してしまおうと思つた。

でも……できなかつた。彼には嫌われたけれど、彼と交わした関係を全て無にすることは出来なかつた。

躊躇い無く過去を消去してきた私だけれど、もう自分から何かを捨てたくは無かつた。例え、彼との連絡が途絶えても、彼と交わした言葉は消えたりはしない。消したくは無かつた。

彼からメールが来た。
惚れた方が負けなのだ。

彼から貰つたメールを受け入れた。彼の存在を許した。

謝りもしなかつた彼。私を傷つけておいて苦しませておいて……それでも彼に何も聞かずに受け入れたのは、決して彼をどうでもいい存在だと思ったわけでもなければ、彼に同情したわけでも無い。ただ、受け止めてあげたかつた。彼の私に対する憎しみや苛立ち、そういう負の感情をぶつけられても、彼を支えてあげられるならそれでよかった。

自分から捨てたくなかつたのだ。例え、捨てられても、もう誰かを自分から手放してしまつのは嫌だつた。傷つけられてもいい。ただ、誰かを抱きしめてあげたかつた。傷ついた心ごと……。それでどんなに自分が傷つこうが、誰かを傷つけるのはもう嫌だつた。

映画を見た。

日本人が書いた小説の映画化。ファンタジー要素が入った不思議で暖かい物語。

横にいるのは新しいお見合い相手、遠藤春朋。

見ていて、突然藍さんのことと思い出した。
一瞬、泣きそうになった。

彼を思い起こさせるような何かがあったわけじゃないけれど、胸
がざわついて……周りに誰もいなかつたら泣き出していくだろう。
彼を思い起こすのはきっとこれが最後だと思つ。もう終わつたと
思つていた恋は、あの瞬間、本当に終わつた。
彼のことを思い返してみて、ふと気付いた。
彼とメールを始めたのは1年前だということを……。
たつた1年。確かに何かがあつたわけじゃない。
でも……
でも……
消せない時間。

さよならは告げなかつた。

明日また

そんな言葉で終わつた関係。

きっともう連絡は来ないだろう。

それでも

また明日。

いのよつな形式で書いたものを小説といつていいのかよくわかりません。

独白のみで語られているのは、自分自信が誰にも話せないことを吐き出した感情を、アレンジして小説に仕立ててみたからですが……小説なのがな」と自分でも悩んでしました。

作中に書けなかつたけれど、一度だけでもいいから紗柚は藍の心からの笑顔が見たかつた。その笑顔を見られるだけで、残りの人生一人でも生きていただこうと思ひます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n90751/>

現のち夢ときどき架空 うつつ のち ゆめ ときどき から
2010年10月8日14時33分発行